



漫才師

きみ
喜味こいしさん

プロフィール

1927年、旅回り一座の座員だった両親の巡業先、横浜市で生まれる。2歳年上の兄で、2003年9月に逝去された夢路いとしさん(享年79歳)とともに子役として舞台に出演していたが、10歳で上方漫才の荒川芳丸師に入門。39年、吉本興業からこども漫才としてデビューし、全国を回った。48年に漫才作家・秋田實さんと出会い、夢路いとし・喜味こいしと改名。その後70年近く続くしゃべり漫才のスタイルを確立させた。その話芸は「漫才の教科書」と評され、文部省芸術祭奨励賞、勲四等旭日小綬章、菊池寛賞などを授賞。大阪市指定無形文化財・芸能「上方漫才」保持者に認定され、後継者の育成にもあたっている。現在は関西テレビの「痛快!エブリデイ」の金曜日レギュラー出演。舞台、講演でも活躍中。

きれいな言葉で、きれいな漫才を NPOで見参! 上方漫才のご意見番

関西テレビの朝のワイドショー「痛快!エブリデイ」。落語家桂南光さんと純子アナウンサーの息の合った司会に加え、人気ゲストの出演や、日替わり企画のおもしろさもあって人気をキープしている。同番組で、金曜日の企画「こんとい亭」にレギュラー出演しているのが、しゃべり漫才で一世を風びした兄弟コンビ「夢路いとし・喜味こいし」の弟、喜味こいし師匠である。

兄のいとし師匠は、2003年9月に79歳で他界。こいし師匠自身も翌年には内臓関係の手術を受けている。相次ぐ逆風に、気遣う関係者やファンも多かったのだが...

どっこい、こいし師匠はお元気だった。前出の、「こんとい亭」は、大阪市北区にある架空の一膳めし屋が舞台。お客として来店するゲストの選んだ食材をスタジオで料理し、ふるまう。常連としてカウンターに陣取るのが、こいし師匠をはじめタージンさん、堀ちえみさん、桂雀々さんらのレギュラー陣。中でもこいし師匠は、南光さんからの「振り」があると、「ある時は聞き流し、ある時は意見して」と、近所の大家さんかご隠居よろしく、板についた演技で雰囲気盛り上げている。「もう、出演をはじめて2年になりますかな」と前置きして、「振ってきたら答える程度です。私が余計にしゃべると南光さんが『ちょっとご隠居、きょうは働きすぎや』言うて(笑)」と目を細める。

健在! 上方漫才への情熱

いとし・こいし両師匠のおいたちや功績については、本冊子(226号、2000年6月発行)で紹介(次ページ参照)。あれから6年あまり。兄・いとし師匠の逝去で自ら漫才を演じることはなくなったが、上方漫才に懸ける情熱は今も健在だ。その一つの形が、昨年発足したNPO法人「上方演芸研進社 mydo(まいど)」への参画である。

理事長は、漫才作家の故秋田實さんの娘さんでもある劇作家の林千代さんだ。NPO設立の狙いは「昔から秋田先生が言うてたことですが、演じるほうが綺麗な大阪弁でしゃべる。台本も綺麗な大阪弁で書いてもらう。漫才に限らずお笑い全般で、綺麗な大阪弁をあやつれる演者や作家を育てようということです」とこいし師匠。関西大学名誉教授で「日本笑い学会」会長の井上宏さんや、プロの漫才・落語の作家、「笑い与健康」に取り組む大学の先生なども参加している。

活動第一弾としてさきごろ道頓堀糸びす座で開催されたのが、「まほら駐在日記 喜味こいしの『わたしはおま

わりさん』」だ。こいし師匠を座長に新発足した「こいし一座」の第1回公演で、はな寛太・いま寛大のコンビや楠本見江子さんのほか、こいし師匠の娘さんが喜味家たまごの芸名で父娘共演を果たしている。

上方漫才のご意見番を自他共に認めるこいし師匠だが、喜味家たまごさんの話になると、とたんに好々爺に変身する。初共演の感想を尋ねると、「どうって?、素人ですからね(笑)。芝居は教えた事もないし、本人が勝手に役どころをこなしているというだけで」といながらも、「踊りは子どものころから。5年ほど前からは新内浄瑠璃も」と、相好を崩すのである。

一病息災 で現役続行

前回のインタビューで、「私が80歳になるまで漫才を続けたい」と話していたこいし師匠。兄いとし師匠との漫才は不可能となったが、今年、数え歳で、その80歳を迎えている。高齢でなお、現役を続けられるのは、一病息災のおかげだろう。

30年前にぼうこうがんをわずらい、健康のため禁煙したのは1997年からだ。

ところが、いとし師匠の死後、心労が重なったためか、「人工ぼうこうがあかんようになって、人工透析の話もたんですが...、結局もう一つの腎臓から直接管(くだ)を取って、新しい人工



今年1月19日、関西テレビ応接室での取材の様子

ぼうこうに尿をとっているわけです」。退院後、やめていたタバコを再び吸いはじめた。それは、「手術のあと、病院で家族や看護師さん、手術したお医者さんらに囲まれましてね。タバコだけでなく酒もやめると。そやけど、何か楽しみなかつたらねえ(笑)」。家族会議の末、どちらかをやめるという話になり、「お酒をやめることにしたんです。お酒はすぐ尿に出るんでわかるんです。尿の色が濃くなってね」と話しながら、うまそうに紫煙をくゆらせるのである。

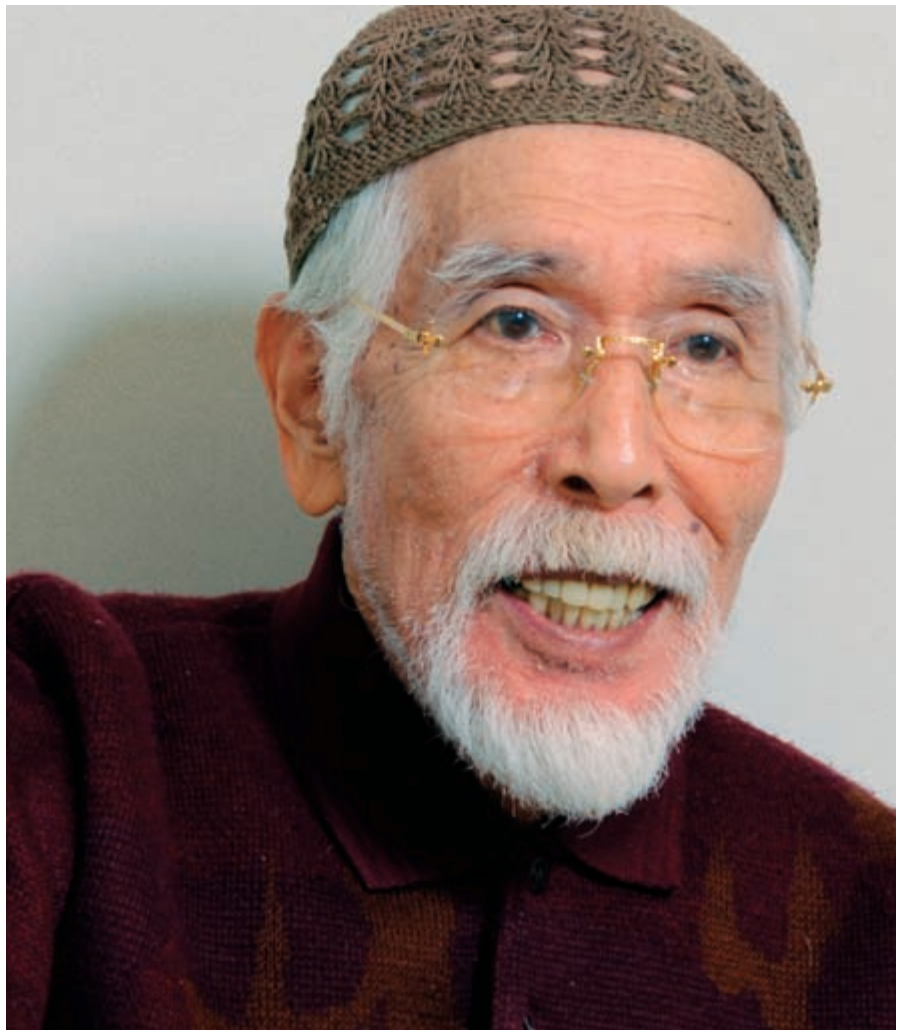
ところで、最近のこいし師匠は、金曜日の「痛快!エブリデイ」でも分かるように、真っ白い口ひげを蓄えている。実は第1回目の入院、手術の際もひげを伸ばしたのだが、「私らの漫才にはふさわしくないですから」と、舞台上上がる時は剃っていたのだ。今回の入院の際も伸ばしていて、「兄貴と漫才をすることがなくなったから」と、退院後も剃らずにテレビや舞台に出るようになったと

いう。ところがこのひげ、ご隠居や長老のイメージを増幅するようで、なかなかの好評ぶり。「この前、もう剃るか言うたら、マネージャーに『剃らんといてくれ』言われて(笑)」と、まんざらでもない様子なのだ。

一方、舞台では「俺、お前」ではなく「僕、君」を大切にしている会話だけで聞かせてきたこいし師匠だけに、最近の若手漫才師たちには苦言もある。「きれいにしゃべってほしい。私の好きなカウス・ボタンや阪神・巨人のようにね。すぐ手を出して相方をどつのは、間が持てんからです。きれいにしゃべっていたらお客さんの笑いが少ないというけど、そんなことはないんですよ」と。

そんなこいし師匠の願いは、「若い作家や演者の成長で、大人から子どもまでに愛される上方漫才が隆盛を迎える時代が訪れること」である。師匠の、ますますの活躍を祈りたい。

(文・脇本勤 / 写真・高島悠介)



前回のご登場をふりかえる

前回のご登場は、7年前の2000年(平成12年)の6月号(226号)。前年に大阪市の指定無形文化財(上方漫才)保持者に認定されたことがきっかけでした。

当時はお兄さんの夢路いとしさんもご健在で、お二人での登場。大衆芸能の子役から子ども漫才としてデビューした、いとしさん14歳、こいしさん12歳のころのお話から、師匠だった荒川芳丸さんの勤めでエンタツ・アチャコの話芸を学び「しゃべくり」一筋の漫才になったこと、テレビ草創期に動かないカメラの前で走ったことなど、たくさんのお話を聞かせていただきました。今後については「漫才は個人のキャラクターがすべてで、落語のように教えられるものではない」との持論から弟子はとらないが、「上方芸能を保存し、引き継ぐための努力はできるだけやりたい」と、多くの後輩たちのことに思いを寄せておられたお二人。その思いが文中にもあるNPO法人の立ち上げにも関わっているのではないのでしょうか。

今回は、「いちよう並木」の300号を記念して、前回のご登場以降の活動について語っていただきました。ご高齢とは思えないエネルギッシュなお話に、編集部も多くのエネルギーをいただいた一日でした。(「いちよう並木」編集部)